

書評

高野昭雄 著 『近代都市の形成と在日朝鮮人』

人文書院（2009年）

安田昌史

これまで京都という都市について、どのように論じられてきただろうか。近年研究書として出版された京都研究としては、佛教大学総合研究所による『成熟都市の研究』（1998年）や、鯨坂学・小松秀雄編の『京都の「まち」の社会学』（2008年）などが代表的なものとして挙げられるだろう。そしてこれら著書のなかでは京都に居住する人口の異質性について論じられている。例えば先の鯨坂学の研究によれば、京都市の伝統産業をはじめとした工業都市の側面に着目して、京都という都市が居住歴の長い住民と同時に京都市以外の市町村や近隣府県の出身者によっても形成されていると指摘している（鯨坂、2008）。しかし実際京都という都市には国内移動による移住者だけでなく、日本の国外にルーツを持つ人びとも様々な歴史的経緯によって移動し居住するようになった。だがその歴史的事実注目し中心的なテーマとして京都という都市を扱った研究書はほとんど見られなかった。

今回紹介する高野昭雄著『近代都市の形成と在日朝鮮人』（2009年）は、そうした日本国外からの移住者やその子孫となる人びとの中でも、京都市その数が最も多い在日朝鮮人¹について焦点を当て、1920年代から30年代の朝鮮人が京都市における居住や職業について京都市や京都府など行政側の資料と突き合わせながら論じている。こうした在日朝鮮人の存在は、既存の京都研究やガイドブックでは語られることが少なかった存在であり、今まで“非可視化”されてきたと言っている。そうした“非可視化”された在日朝鮮人に焦点を当て戦前の京都という都市を論じているという点で、本書は既存の京都研究とは一線を画しているといえる。

ここでは本書の内容について概観していこう。在日朝鮮人の存在と京都という都市の近代的発展に注目し、その中でも1920年代から30年代にかけての京都市が舞台となっている。第一部では戦前京都と朝鮮人との関係について論じられる前段階として、戦前の京都市の諸相について市域拡張と工業の発達、そして都市下層の問題とが関連付けられて考察が行われている。

まず第一章では「市域拡張と都市下層」というタイトルで、1918年と1931年に実施された京都市の市域拡張の際、新市域として編入された地域と都市下層

の問題について論じられている。この時期の京都市や京都府の行政側の統計データを用いることによって、京都市の大規模な都市計画事業と都市下層居住地域の全体との関連が描かれており、この章が本書全体の基礎的部分となっていく。

そして第二章「工業化と都市下層」では、市域拡張とともに発展していく京都市の工業と都市下層居住地域の変容について論じられている。この章でも京都府の資料²を二次利用することによって、京都市の都市下層居住地域の全体像の動態的な把握を行っている。

第三章「不良住宅密集地区」では、戦前の京都市行政側に「八大不良住宅地区」と指定されていた地域³についての考察が行われている。ここでも京都市の資料を用いることによって、京都市の大規模な「不良住宅密集地区」の職業的状況や小規模な「不良住宅密集地区」の様相について論じられている。

そして第二部から京都市の近代都市としての発展と在日朝鮮人との関係について本格的に論じられている。既存の歴史資料から様々な事実を発掘し、戦前の京都市への朝鮮人の流入過程を実証的に論じることで、近代都市形成史の中での在日朝鮮人の位置付けを検討している。

第四章「京都経済と朝鮮人労働者」では、戦前の京都市の市域拡張の背景にある京都経済の特色を朝鮮人に重点を置いて論じられている。京都の商工業の中で特色的であり戦前の一時期に特に盛んであった西陣織や京友禅をはじめとする伝統産業や、それに関連する繊維産業に就労していた朝鮮人労働者の状況について、京都以外の六大都市と比較しながら考察が行われている。

第五章「在日朝鮮人の就業状況」で筆者は従来の研究では「不良住宅地区」に流入した朝鮮人にのみ焦点が当てられてきたと指摘し、「不良住宅地区」外の流入朝鮮人についても研究の視野を広げることがこの章の課題としている。そこで戦前の京都市への朝鮮人の流入状況を「不良住宅地域」、「不良住宅地区」周辺部、新市域と分類し数量的に検討をすることで、流入朝鮮人の流入地域と就業形態にどのような関連があるのかを分析している。

第六章「被差別部落と在日朝鮮人」では、戦前京都市の大規模な「不良住宅地域」の一つである下京区崇仁^{さうじん}地区を事例に、被差別部落地域に生活する人びとの状況と朝鮮人の流入過程について、崇仁小学校の『学齢簿』を用いて分析し、崇仁地区の日本人と朝鮮人のそれぞれの出身地や職業などを明らかにしている。

そして第七章「吉祥院^{きつしょういん}地区における朝鮮人の流入過程」では、1931年の京都市市域拡張の際に新しく京都市に編入された吉祥院地区を事例に、京都市の新市域における朝鮮人の流入過程を明らかにし、彼女らの職業や居住状況について言及している。京都市南西部郊外の吉祥院地区は1935年の京都市でもっとも朝鮮人人口率が高かった地域であるとして、当時の『電話帳』や『商工人名録』を

用いることで、この吉祥院地区の土地区画整理事業や砂利採取業、新京阪電車⁴工事と朝鮮人の関係を解明している。

第八章「上賀茂地区における朝鮮人労働者」では、七章で扱った吉祥院地区と同様に1931年に京都市に編入された新市域である上賀茂地区を事例に、都市近郊の農村地域と朝鮮人との関係について論じている。特にこの章では上賀茂地区で積極的に栽培されている京野菜“すぐき菜”と朝鮮人との関係や、また農村と都市とを結ぶ屎尿処理業と朝鮮人との関係について論じられている。

以上が本書『近代都市の形成と在日朝鮮人』の概要である。冒頭でも述べたとおり、本書では既存の京都についての研究書では“非可視化”されてきた在日朝鮮人に焦点を当て、近代都市としての京都の発展・形成を描いたという点で非常に秀逸な研究書であると言える。またこれまでの歴史研究では見過ごされてきた京都市や京都府の統計などの歴史資料を二次利用したという点や、小学校所蔵の『学齢簿』や『電話帳』などを新しく発掘し分析に用いたという点でも、歴史研究という分野の中で新しい研究アプローチを提示できたのではないだろうか。

そして研究内容に関して、既存の在日朝鮮人研究では被差別部落地域に居住する在日朝鮮人のみを扱った研究が多数を占める中で、この被差別部落地域を含めた京都市域の朝鮮人流入過程や在日朝鮮人の居住状況を分析するために、「不良住宅地域」、「不良住宅地区」周辺部、新市域と分類が行われている。この分析によって被差別部落地域に居住する在日朝鮮人だけでなく、その他の地域、特に被差別部落地域の周辺や新市域に流入し居住する朝鮮人の全体像を把握することが可能になったという点では、在日朝鮮人研究の大きな前進につながるといえる。

また第八章で京野菜の一つとして知られている“すぐき菜”栽培に朝鮮人労働者が関係していたという歴史的事実の新しい発見も、本書が良書であることの一つの理由である。既存の京都研究や在日朝鮮人研究で研究主体となることがなかった“すぐき菜”という農作物に筆者はその研究視野を広げており、通常私たちが研究主体となりえないと考えていたものが十分に研究対象になりえるということを示唆している。

ここからは本書が今後検討すべき課題について触れていきたい。まずタイトルで『近代都市の形成と在日朝鮮人』としているが、本書が研究対象として扱う時期が戦前期の1920年代から30年代までと限定されていることである。朝鮮人労働者が京都に登場し始めるのが韓国併合の1910年前後であると言われているが（水野、1998）、本書ではその時期から1920年代30年代までの時期について在日朝鮮人の動向については不明である。また1940年代から第二次世界大戦後の在日朝鮮人についても描かれていない。このように戦前の在日朝鮮人の事例研究として本書は大きな前進であるが、戦前についてはそれをさらに進める必要

があるだろう。

戦後の在日朝鮮人の諸相が戦前ほど解明されていない問題の背景として、統計資料や新聞記事などの文献などが豊富な戦前に比べ、戦後の在日朝鮮人の実態については把握が難しく、それに合わせて戦前ほど戦後の在日朝鮮人の研究も進んでいるとは言えない。在日朝鮮人研究全体でも戦後の在日朝鮮人の経済社会的状況についての探求が大きな課題となると言える。

そして筆者が京都市京都府などの行政資料や統計資料、また学校所蔵の史料のような文書化された資料を利用することによって研究を進めているが、そのことによって逆に“生きた在日朝鮮人の声”というものがあまり反映されていないのではないかと指摘されているが（小林丈弘氏、本書書評、『朝鮮史研究会関西西部会』2010年9月例会）、使用する資料の偏りによって当事者となる朝鮮人の姿が不明瞭なものとなっているのではないだろうか。このあたりも筆者の今後の研究課題となってくるだろう。

この本書が扱っている事例は戦前の1920年代から30年代という非常に限定された時代における「京都市」という一つの都市についてである。しかしながら21世紀の現在においても、本書の事例は「都市下層」や「移民」、「労働」、「居住」という点で世界各地の都市で起こっている問題とも共通しているのではないだろうか。

参考文献

- 鯉坂学、2008、「京都の伝統産業と「まち」の移り変わり」、『京都の「まち」の社会学』、世界思想社、1-30.
- 佛教大学総合研究所編、1998、『成熟都市の研究－京都のくらしと町』、法律文化社.
- 水野直樹、1998、「京都における韓国・朝鮮人の形成史」、『KIECE 民族文化教育研究』、京都民族文化教育研究所、70-81.
- 総務省統計局、2007、『平成17年国勢調査報告』、総務省統計局

注

- 1 国籍別で京都市の人口を見た場合、2005年実施の国勢調査によれば京都市における外国籍人口35,795人中、韓国籍・朝鮮籍の者が23,164人であり、京都市の外国籍人口の6割以上を韓国籍・朝鮮籍の者が占めていることが確認できる。その次に多いのは中国籍者で4,800人であった（総務省統計局、2007）。
- 2 京都市要保護世帯全体を調査対象にした京都府学務部社会課『少額生活者に関する調査』（1933年）。
- 3 京都市の行政調査『不良住宅密集地区に関する調査』（1929年）、『京都市に於ける不良住宅地区に

関する調査』（1940年）で調査対象となった地区。これら地域は京都市の被差別部落地域であったとし、筆者は被差別部落地域を指す表現として『不良住宅地区』という用語を用いている。

4 現在の阪急電鉄京都線。